

うるま市地名散歩⑨

名嘉山 兼宏

栄野比(ユヌビ)

栄野比の今昔

栄野比は、方言で「ユヌビ」という。うるま市の北西より東恩納と接し、かつては「行き苦りしや苦りしや楚そ南山城なんやまぐしゆくん行き苦りしや 栄野比川崎」と謡われたほどの寒村の地であった。現在では沖縄市方面と石川・北部地域を結ぶ国道329号線が走る交通量のはげしいところとなっている。

栄野比は、はじめ元島と呼ばれる西南の台地斜面にあったが、明治初期の天然痘の流行によって多くの犠牲者が出たので現在の地に移ったと言われる(具志川市史)。明治十四年上杉県令が民情視察のため、具志川番所から田場・宇堅・天願・川崎・栄野比を通じて大井川(ウフンガラ)を輿こにのって渡ったことが記されておられ、当時の天願川の水量の豊かさを窺うかがい知ることができる。戦前には前平安名というところにはアダンバー工場や水車を利用した

藁わら(カマス)の工場もあったという。戦後の栄野比は、琉球放送の前身であるAKAR(後のKSAR)が開局し、敗戦でうちひしがれた沖縄の人びとの心の支えとなった。またサイパンからもち帰ったといわれるリズムカルでコミカルな「島民ダンス」は字の伝統芸能として定着し、市民に人気がある。



十五夜に字のアシビナーで披露される島民ダンス

古くは延濃比(イノビ)

栄野比についての古い記録をひらいてあげてみると

- ・一四七六年・・・延濃比(イノビ)『進貢船一覽表』)
- ・一六四〇年頃・・・糸のび(『琉球国高究帳』)
- ・一七一九年・・・栄野比・イヌファイ(『中山伝信録』)

・一八一九年・・・エノビ(『琉球船漂着始末』)となっており、栄野比はもともと「イノビ」でそれと「イヌファイ」は併用されながら「エノビ」↓「エノビ」と転訛してきたものと考えられる。

イノビ・エノビの意味

先に述べた通り、栄野比のもとの地名は「イノビ」である。このイノビの「イノ」は「井の」と考えられる。井は、水や川と関係することばでここでは、川のこと、即ち栄野比の「ウフンガラ(大井川)」のことを意味する。このことは他府県の井口(イノクチ)、井上(イノウエ)など多くの例があり東京や静岡にある「井の頭」は水源地を意味するところある(コンサイス日本地名事典)。

なったが、急須きゅうす(チュウカー)の口から茶碗をつかわず直接口に流し込む姿がよくあった。これを方言では、「ビーゲチャー」と言った。急須から茶碗に注ぐ管が「樋」(ビー)である。以上のことから栄野比の語源は「井の樋(イノビ)」で、井は大井川(ウフンガラ)を指し、樋は用水路、川の流れのことで「井の樋」からきた地名である。かつての水量豊かなウフンガラの水を川崎川の合流点まで運ぶ用水路として、そしてその川の近くに位置する村を「井の樋・イノビ」と表現し、命名した。

「イノビ」から長い年月のあいだに「糸ノビ」「イヌファイ」など転訛しながら「栄野比」と表記されるようになった。

ヒ(ビ)は、「樋」のことをさしていると考えられる。垣花の樋川や那覇の樋川など水を運ぶ用水路や管のような役目をするものにつけられる。大宜味村喜如嘉きじよかに「ウンダビー」というところがあるが、その「ビー」の意味は「用水路である」としている(ふあるやま・イギミの里地名考・福地曠昭ふくちひらあき。名護市の為又(ビイマタ)の「ビ」も同じ意味だろう。現在ではあまり見受けられなく



子どもたちの格好の遊び場だったウフンガラ